高等小學國語讀本 三學年用 一

10
53

検定申請中

K120.8
68.5
5

K120.8
68.5
5

伯爵 副島種臣 閲
伯爵 東久世通禧 閲
西澤之助 編

高等小學國語讀本

東京 國光社藏版

緒言

本書は、改正小學校令の旨趣に據り、高等小學校國語科の教科用書に充てんとて編纂せるなり。

本書は材料を、修身、歴史、地理、理科、實業、其の他、日常の生活に必須なる事項に採りて、教授に、多方の趣味を添へたり。

三、忠孝の大義を明め、公德の美風を養ひ、理科の思想を養成するは、殊に重要と認むるが故に、毎卷、必、適當の教材を掲げて、反覆講説せり。

四、本書は、國語の模範たらしめんが爲に、勉めて、文章を、簡易流暢ならしめ、言と文とを接近せしめたり。

五、本書は、全編を、六冊とし、毎學年、各二冊を課し、三學年にて修了せしむべき豫定なり。

六、本書は、每卷、各課をして、横に、聯絡を保たしめ、又、各學年の教課をして、縱に聯絡せしめたれば、これによりて、生徒の觀念を鞏固ならしむることを得べく、且、單級の學校に用ゐても、便益尠からざるべし。

七、本書は、教材の排列を、季節と關聯一致せしめ、以て、學習の興味を深厚ならしめたり。

明治三十四年八月

編者識

高等小學國語讀本一

目次

第一課　玉のひかり　五
第二課　我が家　七
第三課　春の野　十
第四課　蝶と蜂　十二
第五課　寄生蜂　十四
第六課　草木　十七

第七課　伊藤小左衞門　十九
第八課　茶　二十四
第九課　分業　二十六
第十課　女子の務　二十九
第十一課　工藝　三十二
第十二課　養蠶　三十五
第十三課　上杉治憲　三十七
第十四課　霜の害を防ぐ法　四十

第十五課　四季　四十二
第十六課　游泳　四十五
第十七課　河海　四十八
第十八課　商業見習　五十
第十九課　貨幣の用　五十五
第二十課　日記　五十九
第二十一課　霧嶋山（一）　六十二
第二十二課　霧嶋山（二）　六十五

第二十三課　太沽砲臺の占領　六十八
第二十四課　天津城の陷落　七十一
第二十五課　雲にそびゆる　七十五

高等小學國語讀本一

伯爵　東久世通禧　閲
伯爵　副嶋種臣　閲
西澤之助　編

第一課　玉のひかり

金剛石もみがゝずば
玉のひかりはそはざらん
人もまなびて後にこそ

まことの德はあらはるれ
時計のはりのたえまなく
めぐるが如く時のまの
日かげをしみてはげみなば
如何なるわざか成らざらん

この御歌は、皇后陛下のよませたまへるなり。我等は、この御歌のこゝろを、我が心として、今より、さらに、學をつとめ、業をはげみ、よき人となりて、君のため、國のためにつくすべきなり。

第二課　我が家

我が家には、父母と祖父母とありて、常に、我等を愛し給へり。我等は、兄弟四人にて、兄は、中學校の寄宿舍にあり。妹と、弟と、我とは、家にありて、仲よくくらせり。

我は、日々、妹をともなひて、學校にゆき、家

に歸りては、共に、復習するを例とせり。

弟は、未、學校には入らざれども、我がかたはらに來て、讀み書きなどのまねをして遊べり。

我が家は、先祖の、たんせいしておこされたるなり。居間のなげしには、勤儉の二字をしるせる額かゝれり。こは、我が家風をあらはせるなり。勤にあらざれば、財を得

勤儉

がたく、儉にあらざれば、家を保ちがたし。

されば、我れ等は、この、貴き家風を守りて、ますます、家を榮えしめんことを心がけざるべからず。

もし、この家風にもとるときは、先祖に對して、大

なる不孝といふべきなり。

第三課　春の野

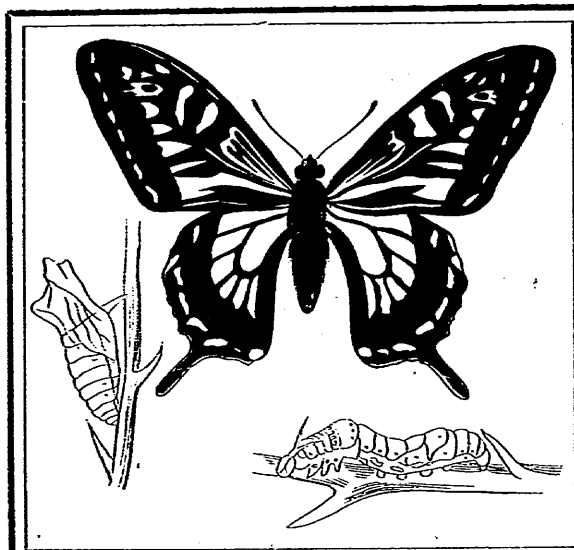
野べには、若草が、青々とはえ、菫（スミレ）、たんぽぽ、れんげ草、菜の花などが、さま〳〵に咲きみだれて、錦をしいた様でございます。

蝶が、二つ三つ、戯れて飛びめぐってゐるのは、櫻の花にあきて、菜の花をもとむるのか、菜の花にあきて、櫻にとまらうとするのか。其の、風にまかせて、ひら〳〵としてゐる様は、まことに面白うございます。

堤の柳に、馬をつないで、景色をながめてゐる人もあれば、道のほとりに、つくしをつんで、遊んでゐる子供もあります。

四季のながめは、いろ〳〵ございますが、春は、とりわけのどかで、いづれを見ても、面白からぬものはございません。

第四課　蝶と蜂



蝶は、種類、甚多く、羽の色の、白きも、黑きも、黃なるも、まだらなるもありて、いづれも、まことに美し。

これらの蝶は、多くの卵をうむ。卵かへれば、毛虫となり、草木の葉をむさぼり食ひて生長し、化して、蛹となり、また化して、蝶となる。

蜂も、亦、種類多き昆虫なり。其の中、人の飼養するものを、蜜蜂といふ。蜜蜂には、王蜂、雄蜂、工蜂の別あり。集まりて、巣を營み、各、その職を守り、相助けて生活す。

王蜂は、雌蜂にて、形、大きく、一巣ごとに、一疋づゝ住み、卵をうみて、種族をふやす。雄

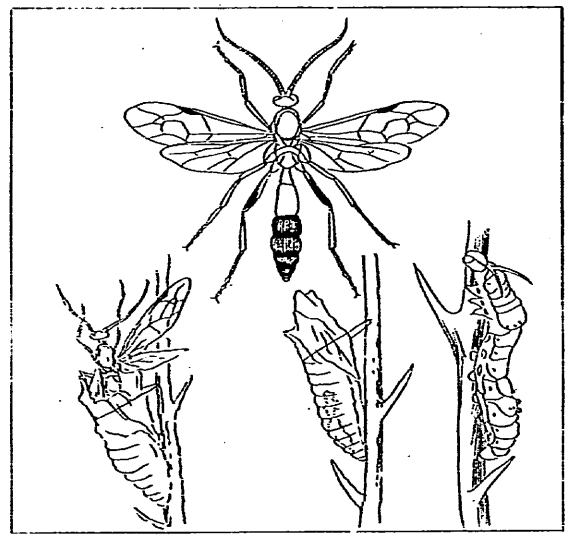
蜂は、王蜂よりも、小にして、一巣の中に、數

て、其の數、最多く、巣を造り、食を運び、敵を防ぐなどを職とせり。

蜜蜂は、花の液を吸ひ取りて、巧に、蜜をかもす。この蜜は、效用多きものなり。

足あり。工蜂は、勞働者に

第五課　寄生蜂



蝶類は、きれいで、愛らしいが、多くは、農家の害虫である。蜂類は、はりがあって、恐ろしい様であるが、その中には、農家の益となるものが多い。ことに、寄生蜂は、最、農家の助をする

ものである。

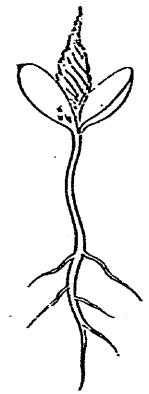
寄生蜂は、卵を、害虫の體内に產みつける。その卵は、まもなくかへつて、うじとなり、害虫の體肉を食つて生長し、害虫が、蛹となつて、數日をふる間に、うじは、その肉を食ひ盡して、蛹と化し、再化して、蜂となつて飛び出でる。また、うじの生長が早い時には、害虫は、蛹となり得ないでたふれることもある。

この寄生蜂には、種類が多い。稻、麻、桑等の害虫が、寄生蜂にたふされる數は、まことに、すくなからぬといふことである。

第六課　草木

田畑ニマキタル穀物、野菜ノ種モ、水ニウルホヒ、日ニ暖メラレテ、根ヲ生ジ、芽ヲ出ダセリ。スベテ、草木ノ根ハ、種ヨリ下ニ出

デ、土中ニハビコリテ、養分ヲ吸ヒ取ル。草木ノ倒レザルモ、コノ根アルガ故ナリ。芽ハ、次第ニ成長シテ、莖、又ハ、幹トナリ、枝ヲ分チ、葉ヲ生ズ。



初ハ、掌ノ上ニ、數百粒ヲモ載セ得ベキ、小キ種ニテモ、芽ト根トヲ生ジテ、年ヲ經レバ、幾カヽヘトイフバカリノ大木トモナルナリ。

凡、植物ニハ、稻、豆、粟等ノ如ク、春、芽ヲ生ジテ、秋冬ノ頃ニ枯ルヽモアリ。又、麥、菜等ノ如ク、秋、芽ヲ生ジ、翌年ノ夏ニ至リテ枯ルルモアリ。是等ハ、ホヾ、一个年ヲ、命トスレドモ、松、杉、桑、茶、漆等ノ如ク、數十年、若クハ、數百年ノ生命ヲ保ツモノモアルナリ。

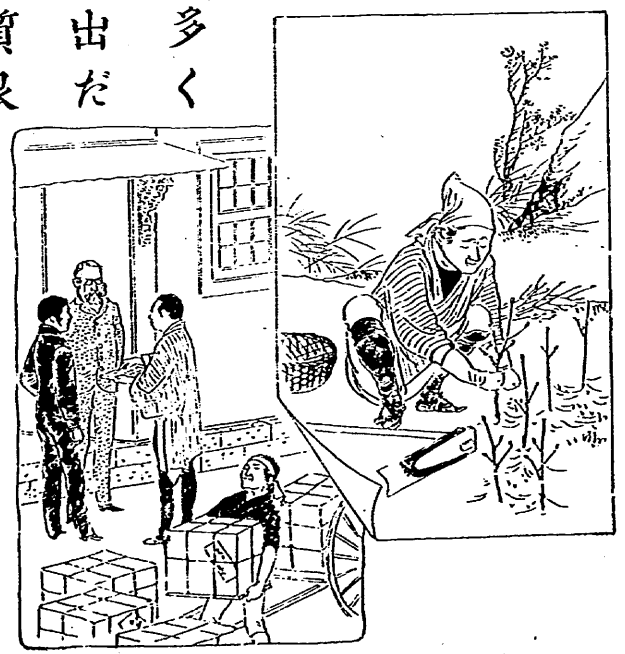
第七課　伊藤小左衞門

伊藤小左衛門は、伊勢の國三重郡四郷村の人にして、家、代々、農を業としけり。

小左衛門、若き時より、産業をおこさんと思ふ志ありき。外國貿易の開けんとせし頃、製茶の業を思ひ立ち、山地を開きて、茶の樹をうゑ、人々にも勸めしに、うゑなはざるのみならず、あざけり笑ふ者さへありき。小左衛門、少しもかへりみず、益、茶園をひろめて、五年の後には、二十貫目の茶を得るに至れり。

後、横濱、開港となりければ、十餘萬斤の茶を、外國人に賣り渡し、二千六百兩の利を得たり。先にあざけりし者ども、之を見て、大に感じ、爭ひて、製茶の業を始めしかば、遂に、國中に廣まりて、産出、おびたゞしくなれり。

小左衞門、又、養蠶の、益あることを知り、先、桑二百株を得て、業を起し、多年の苦心を、つひに、製絲機械をも備へて、多くの生絲を造り出だせり。されど、品質良



からずして、すくなからぬ損失をせり。

小左衞門は、自、上野の富岡製絲場に入りて、業を修め、歸りて後、五十二貫目の絲を製して、横濱に送りしに、また、損失をかうむれり。小左衞門、なほ、少しもたゆまず、明治九年、妻と娘とを、富岡にやりて、業を習はしめ、更に、機械を改め、職工をまし、二百十貫目の絲を製して、横濱に送れり。此の

時、外商、富岡製にもおとらずとて、高價に買ひ取れり。

小左衞門、いよ〳〵勵みて、製絲、製茶の業を盛にし、遂に、其の志をとぐるを得たり。

第八課　茶

茶は、香しく、風味よき飲料にて、心をさわやかならしむるものなり。

茶には、緑茶、紅茶等の別あり。我が國にて

産するは、多くは、緑茶なり。その上等品を、玉露といひ、下等品を、番茶といふ。

茶の樹を培養するには、暖にして、濕氣少き土地をよしとす。種をまきて、凡、四年目より、毎年五月の頃、若き芽をつみとりて製するなり。

産地は、山城の宇治、古より名あり。靜岡、三重、岐阜等の諸縣、并に、臺灣にても、多く産

す。我が國輸出品中の主要なるものなり。

第九課　分業

茶ヲ製スルニ、芽ヲツムハ、概、女子ノ業ニテ、コレヲ製シ上グルハ、男子ノ業ナリ。芽ヲツムヨリ、製シ上グルマデ、スベテ、一人ニテスルヨリハ、業ヲ分ツヲ、便ナリトス。モシ、一人ニテ、或ハツミ、或ハムシ、或ハモミ、或ハモチ運ブナドノコトヲセバ、ソ

ノ忙シサニタヘズ、種々ノコトニ、注意ヲ要スルガ故ニ、煩シサモ、亦、限ナカルベシ。

之ニ反シテ、數人ニテ、業ヲ分タンニハ、專ニ務ムルコトヲ得ベキガ故ニ、オノヅカラ、其ノ業

ニ巧ニシテ、良キモノヲモ製シ、多量ニモ造ルコトヲ得ベシ。

カクノゴトク、業ヲ分ツコトヲ、分業トイフナリ。

世ノ中ノ事ハ、概、分業ニテ行フナリ。タトヘバ、一家ノ生計ヲ營ムニ、男子ハ、日々、職業ヲ勉メ、女子ハ、衣食ノ事ヲ專ニスルガ如シ。其ノ他、農夫ノ、穀物、野菜ヲ作リ、職工ノ、器具、家屋ヲ造リ、商人ノ、物ヲ賣買スルモ、亦、皆、分業ニアラザルハナシ。

スベテ、人ハ、各、業ヲ分チ、互ニ、相助ケテ、生活ヲ全クスルコトヲ得ルモノナリ。

第十課　女子の務

女子の務は、多く、家内の事で、食物をとゝのへ、衣服を仕立て、老人をいたはり、小兒を養育し、又、親戚、近隣とつきあひ、來客を

もてなすなどが、重なる事でございます。たとひ、學問、技藝にすぐれてをりましても、是等の事が、かけてゐましては、やくにはたちませぬ。

それ故、女子は、をさない時から、つとめて、家事の手傳をして、是等の事に、とゞこほりない樣にならねばなりませぬ。

其の上、暇があらば、縫箔（ヌヒハク）、編物（アミモノ）、造花等のけいこをするも、宜しうございませう。

絲繰、機織なども、女子には、適當の業でございます。我が國の重要な產物で、年々、海外に輸出する織物、生絲などは、たいてい、女子の手で出來るのでございます。

たゞ、己が身を着かざることばかり心がけて、女子の、大切な務を、おろそかにしてはなりませぬ。

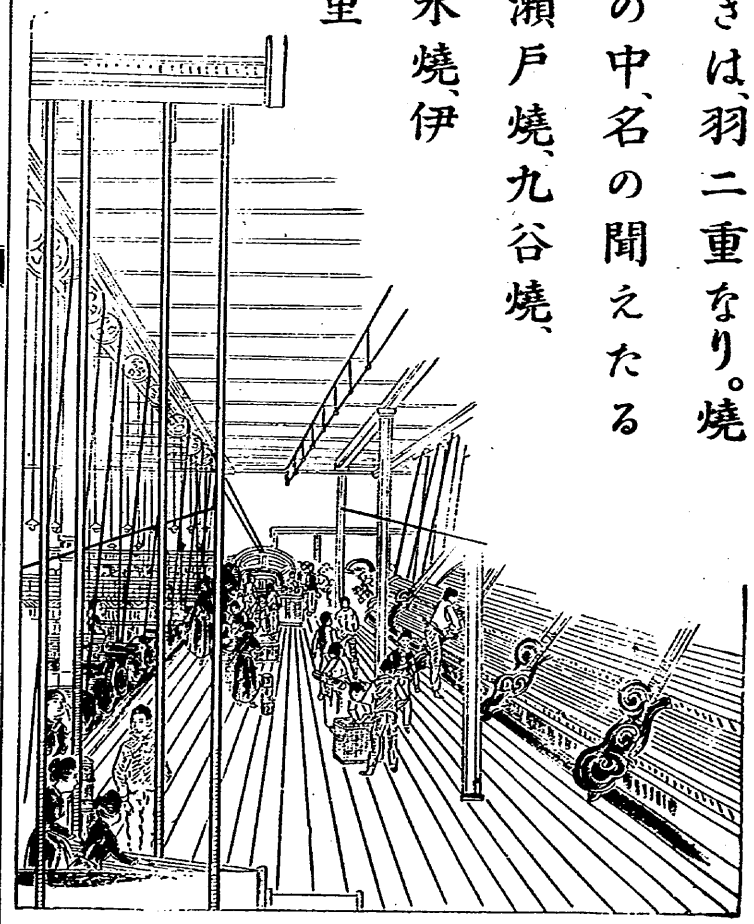
第十一課　工藝

我が國の人は、昔より、手工に長けたり。そのうへ、常に、よき景色になれて、風雅の心に富みたれば、工藝品にも、おのづから、一種の趣味加はれり。

我が工藝品の中にて、最、名高きは、燒物、塗物、織物等なり。

織物の精巧なるは、西陣織にて、輸出額の

多きは、羽二重なり。燒物の中、名の聞えたるは、瀨戸燒、九谷燒、清水燒、伊萬里燒



などにて、塗物の、最、麗しきは、蒔繪なり。

其の他、なほ、細工物には、竹細工、寄木細工、紙細工、麥稈細工等、其の種類、はなはだ多く、中にも、麥稈細工、竹細工等は、年々、外國に輸出する量おびたゞし。

ちかごろは、宏大なる機械をしかけ、多數の職工をつかふ紡績工場、織物工場、製絲場など、年々に、盛になり、製造の高も、ます

ます、多くなれり。

又、理科の學問も、大に進歩したれば、精巧なる機械もでき、水力、蒸氣力、又は、電氣力などをかりて、之を動かす術も發達したれば、製品は、精良になり、價も、いよ〳〵ひく〳〵なれり。

第十二課　養蠶

我ガ國ハ、氣候溫和ナレバ、內地、到ルトコ

口、蠶ヲ養ハザルハナシ。殊ニ、上野、岩代、磐城、信濃、甲斐等ハ、其ノ業、最盛ナリ。

蠶ノ飼方ハ、先、其ノ卵ノ孵化シタル時、藁坐ニ掃キタテ、初ハ、桑ヲ、細ニキザミテ、之ヲ與ヘ、成長スルニ從ヒテ、次第ニ、キザミ方ヲアラクシ、後ニハ、丸葉、又ハ、枝ニツキタルマヽヲ與フ。サテ、蠶ハ、發生シテヨリ、四眠ノ後、絲ヲ吐キテ、繭ヲツクルナリ。

蠶ヲ養フニハ、氣候、蠶室ノ構造、桑ノ擇方、飼方等ニ注意スルヲ要ス。コレ、繭ノ收獲、及、性質等ニ、大ナル關係アレバナリ。

繭ヨリトリタル絲ヲ、生絲トイフ。即、絹織物ノ原料トナルモノニシテ、我ガ國ノ輸出品中、金額ノ、最多キモノナリ。

第十三課　上杉治憲

上杉治憲は、羽前米澤の藩主なり。初、其の

領内貧しかりければ、之を救はんと志し、先己が朝夕の膳部をば、一汁一菜とし、衣服は、木綿に限りて、絹布を用ゐず、自、先んじて、田畑を

耕し、夫人をして、蠶を養ひ、機を織らしめ、しきりに、士民を勵まして、産業を盛にすることをはかりけり。

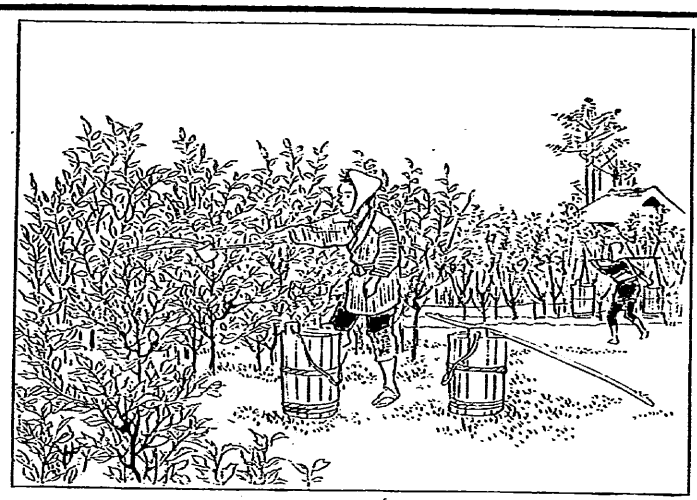
又、儉約を行ひて、あまし得たる財にて、桑、漆、楮等の苗木、各百萬本を買ひ入れて、ひろく、領内に栽ゑしめ、且、養蠶の術にくはしきもの、機を織るにたけたるもの等を、雇ひ入れて、其の業を、士民に敎へしめき。

是より、やうやく、精巧なる織物を製出するを得て、治憲の初志の如く、領内富み榮ゆるに至れり。

今、尚、米澤織の名、世に高く、年々、多額を産出す。

第十四課　霜の害を防ぐ法

霜の害は、養蠶家の、最おそる〻ものなり。今、こ〻に、極めて簡單なる豫防法をのべん。



天氣晴れ渡りて、風なき夜、溫度、急に下りて、夜半、すでに、華氏寒暖計三十七度以下に下れば、翌朝、霜のむすぶを常とす。か〻る時は、午前四時頃に、桑園、及、

桑葉に、多量の冷水をそゝぐべし。かくすれば、霜のむすぶことなし。

又、霜の、すでにむすびたる時には、日出前、霜の、いまだ解けざるに、桑葉に、冷水をそそぎかくべし。かくすれば、霜の害を免る。

霜の害は、その解くるときに生ずるなり。

第十五課　四季

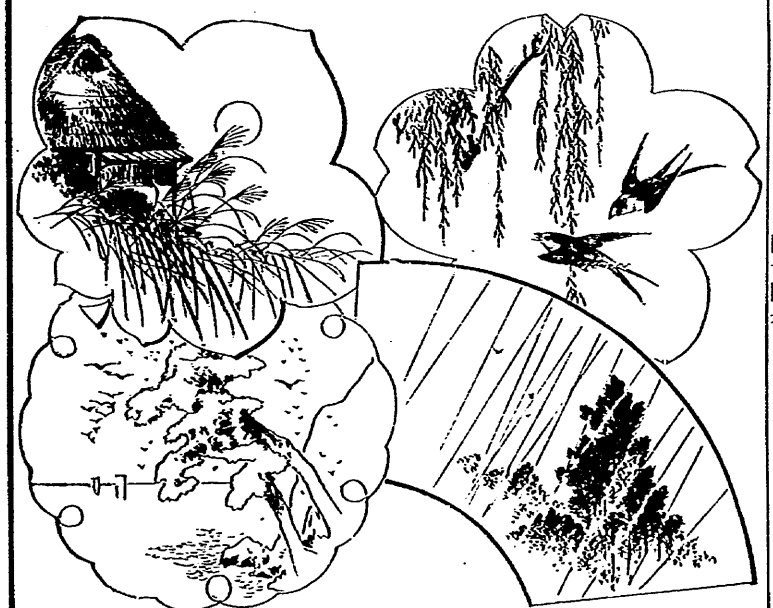
木枯の風吹きあれて、霜柱立つ頃は、晝短くて、夜長く、氷は、池の面をとぢ、雪は、ま白に降りしきて、鳴き渡る雁の聲さへ、寒げなり。

若草もえ出で、花咲きにほふ頃となれば、百鳥のさへづる聲ものどかにて、心うきたつばかりなり。

青葉のしげる頃となれば、晝長くして、夜短し。やくが如き夏の空、にはかにかき曇

りて、夕立の、はげしく降り出でたるは、すゞしさ、いふばかりなし。

草むらになく虫の音、あはれにきこえ、野山



の木々色づきて、錦を織りかくる頃は、のきばの月もすみまさりて、心、何となくさびしげなり。

春夏の間は、物、皆、日々に榮え行けども、秋より、次第に衰へて、また、春のたちかへるまでは、冬ごもりをする時なり。

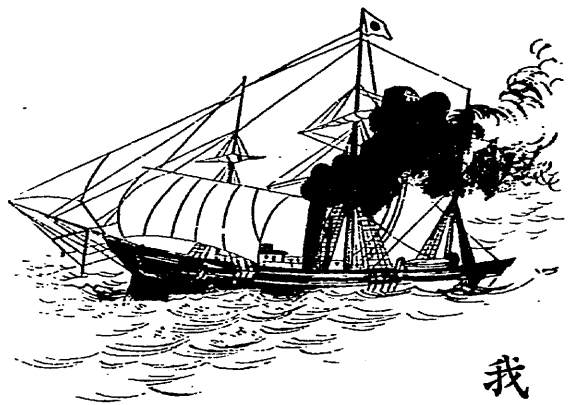
第十六課　游泳

多クノ小兒等、濱邊ニ出デ、遊ベリ。水中

ニ入リテ游グモアリ。クヾルモアリ。小舟ニ乘リテ、沖ニコギ出デタルモアリ。浪ヲモオソレズシテ、ヨク游ゲルモノハ、其ノワザニ熟セルナラン。

幼キトキノシワザニテ、成長シタル後ノ事モ知ラルトイヘバ、コノ小兒等

ハ、壯年ニ至ラバ、或ハ、海上ノ生活ヲ營ムナルベシ。



我ガ國ハ、四方、海ニシテ、水産物ニ富メバ、漁業ヲ營ムモ面白カルベク、蒸氣船、帆前船ニ乘リテ、遠洋ノ航海ヲ業トスルモ樂シカルベク、又、海

軍ノ軍人トナルモ、名譽ノコトナルベシ。コノ小兒等ノ行末ヲ思ヘバ、誠ニ、タノモシキ心地スルナリ。

第十七課　河海

水上ニ、船ヲ浮ベテ、自在ニ往來スルハ、タトヘバ、陸地ニ、車馬ヲハスルガ如シ。我ガ國ハ、四面、海ニシテ、良港多ク、河流モ、スクナカラザレバ、交通、頗便利ナリ。

又、河海ヨリハ、多ク、產物ヲ出ダス。特ニ、海ハ、廣大ナレバ、魚介、海草ヨリ、鯨、臘虎（ラッコ）等ノ海獸ニ至ルマデ、殆、カゾヘ盡シ難シ。

河ハ、產物、海ニ及バザレドモ、田畑ヲウルホシテ、農業ヲ助ケ、或ハ、水力ヲ供シテ、工業ヲ利スル等ノ效多シ。

海ト河トハ、カクノ如ク、人ヲ益スルモノナレバ、河海ニソヒテ便ナル地ニハ、人々

集マリテ、村落ヲナナシ、都會ヲモナスナリ。タトヘバ、東京ハ、海ト隅田川ト二ソヒ、京都ハ、鴨川ニマタガリ、大阪ハ、海ト淀川ト二ソヒタルガ如シ。

又、船ヲトムルニ便利ナル港ニハ、盛大ナル貿易場モ開カル、ナリ。長崎、横濱、神戸、函館等ノ如キ、コレナリ。

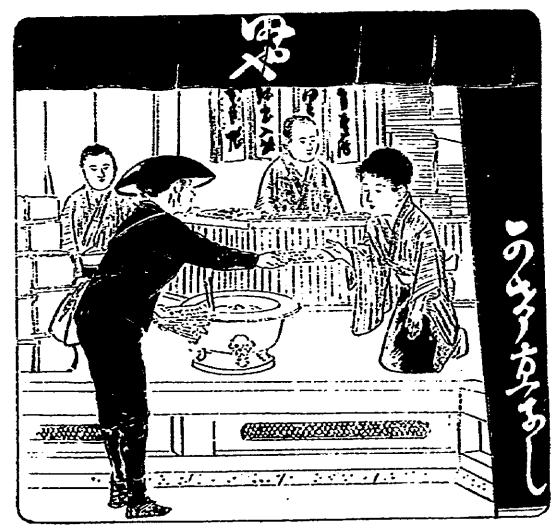
第十八課　商業見習

國友敬次郎は、小學校を卒業して後、商業見習として、ある商人の家に奉公しけるに、或日、國元の兄より、荷物と手紙と届きたり。

暑さ烈しく候處無事に御勤めのよし何よりの事に存じ候當方父上始皆々別條なく候へば御安心なさるべく候

單衣二枚母上より其許へ遣すべき樣

仰せられ候に付小包郵便にて差送り
候間御受取な
さるべく候父
上よりは御主
人大切に相勤
め朋輩仲よく
致すべき樣吳
吳も仰せ傳へられ候よく〳〵御心得



これあるべく候算筆其他必要のこと
はつね〳〵心掛けひまを見て御勉強
なさるべく候尚時節柄御身大切に致
され候樣祈入り候早々以上
敬次郎は、大に喜び、其の夜、返事をした、
めてさし出だせり。
御手紙拜見仕り候御兩親はじめ皆々
樣御機嫌よく入らせられ候由大慶の

至りに存じ奉り候單衣二枚御送り下
され有難く拜受仕り候
御教訓の御言謹んで拜承仕り候御主
人も番頭衆も相變らず懇に御引立下
され朋輩仲よく相勤め居り候間御安
心下され度候先はとりあへず御返事
申上げたくかくの如くに御座候早々
頓首

第十九課　貨幣の用

上古には、貨幣といふものが無かったので、人々、互に、物と物とを交換して、用を辨じてをりました。

譬へば、こゝに、燒物師があるとしませう。この人が、米を得ようと思って、農夫の家にいって、自分が造った器とかへてもらはうとするに、この農夫は、雉、兎の類を得

たいとは思ふが、器は、入用でないといふ時には、燒物師は、又、狩人（カリウド）のもとにいつて、交換を求め、尚、この狩人が、承諾しない時には、他に、あまねく、相手をさがさねばなりません。農夫も、狩人も、自分が得たいと思ふ物があるときには、亦、この樣に、手數がかゝつたのでございます。

か樣な不便がありますので、遂に、物と物とを交換する媒となるべきものを定める樣になりました。これが、貨幣のはじめでございます。

貨幣ができましてからは、餘つてゐるものは賣つて、之に換へ、何でも、入用のものを、自由に買はれる樣になりました。

さて、この貨幣には、最初、いかなるものを用ゐたかといふに、國によりて、一樣でご

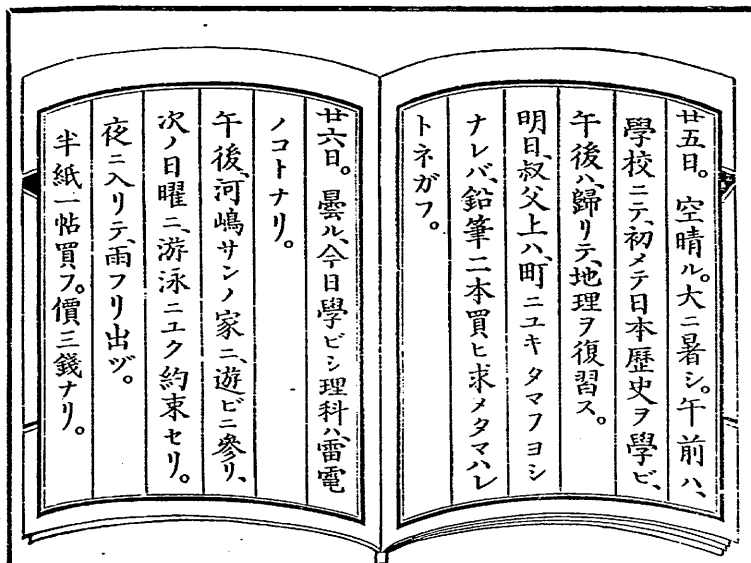
ざいません。我が國では、上古、稻を用ゐまして、物の價を定めるには、稻幾束、幾十把など〻申しました。又、支那では、貝を用ゐ、西洋では、烟草、毛皮、牛などを用ゐた國もありました。

今は、いづれの國でも、金、銀、銅、及白銅等を用ゐて、貨幣として居ります。また、携帶の便をはかって、銀行では、政府の許を受けて、紙幣をも發行いたします。

第二十課　日記

商人の、日々、賣買、取引等を記しおきて、金錢の出納を知るは、極めて、必要のことなり。吾等も、日記をつくり置かば、記憶の助ともなり、一生の歷史ともなるべし。

日記は、要をつゞめて記すをよしとす。先、其の日の天氣模樣、暑さ寒さなどを記し、次



に、通學、外出等の事より、見聞したる、面白きことがら、又は、筆墨等を買ひ入れたることなどをも書き入れおくべし。少年の時は、學校、家庭、又は、朋友間の事

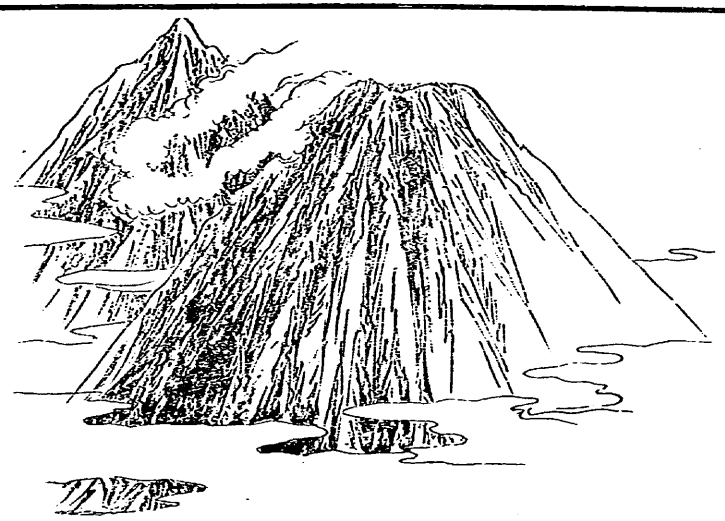
柄を記しおかば足るべけれども、尚、家族、來客のことより、廣く、世の中の事柄をも記さば、作文の助ともなり、後のたのしみともならん。

日記には、又、旅日記といふものあり。修學旅行の時などに、通行せし地名、里程、民業、風俗、山川の景色、旅宿の模樣、同行者の間に起りしことなどをも記しおかば、地理

を知る便利もありて、興味大なるべし。

第二十一課　霧嶋山（一）

霧嶋山ハ、日向、大隅ニマタガリテ、山ハ、東西ノ二ツニ分ル。西ナルヲ、韓國嶽（カラクニダケ）トイヒ、東ナルヲ、高千穗（タカチホ）ノ峰トイフ。何レモ、火山ニシテ、時々、煙、或ハ、火ヲフキ出ダスコトアリ。世ニ傳フ。昔、皇孫瓊々杵尊降臨シ給ヒシ時、コノ山、霧ノ中ニ、嶋ノ立チタル



如ク見エケレバ、霧嶋山ト名ヅケ給ヘリト。

コノ山ニ登ルベキ道、二ツアリ。何レヨリ登ルモ、風光ウルハシク、旅ノ勞ヲオボユルコトナシ。山

下ニハ、溫泉アリ。浴シ終ヘテ、霧嶋神社ニ詣ヅ。宮居、神サビテ、殊ニ美シ。

コヽヲ發シ、雜樹生ヒ茂リテ、日影モ見エザル程ノ處ヲ、五十町餘、登リニ登レバ、是ヨリ上ハ、樹木、一本モナク、四方ウチハレテ、薩摩、大隅、日向ノ山々ハ、アシノ下ニ拜伏スルガ如クニテ、一モ、目ヲサヘギルモノナシ。

遙ノカナタヲ見レバ、青疊ヲシキタルガ如キ海中ニ、突然ト秀デヽ、盆石ニ似タル櫻嶋山アリ。頂ヨリ、白キ煙ノ立チ上ル景色、筆紙ニ盡シ難シ。

第二十二課　霧嶋山（二）

コノ、草バカリナル處ヲ、又、五十町ホド登レバ、コレヨリ上ハ、草モナク、只、栗ホドノ燒石ノミナリ。路、益ケハシク、登ルニ從ヒ

テ、天地ノ氣色カハリ、不時ニ、下ノ方ヨリ、雨ソヽギ來リ、或ハ、風、横サマニマキ來ルコトアリテ、殆、眺望ノ暇ナシ。折々ハ、ウツブシニナリテ、風ヲ避ケ、千辛萬苦シテ馬脊越（セゴエ）トイフ處、八町ガ間ヲ走リ過グレバ、マッスグニ登ル處アリテ、絶頂ニ達ス。

絶頂ハ、尖リテ、僅ノ地面ニ、天逆鉾（アマノサカホコ）アリ。全體ハ、カラカネノ如クニ見ユレドモ、風霜

ニサラセルモノナレバ、青クサビテ、シカト知レ難シ。長サハ、一丈ニモ餘リ、太サハ、大ナル竹ホドナリ。土中ニ入リタル先ノ方ハ、何程ナルカ、知ルベカラズ。絶頂ハ、コノ鉾一本ノミニテ、外ニ、堂宇等ノ如キモノモナシ。鉾ハ、神代ノ舊物ナリヤ否ヤハ知ラレザレド、三百年、五百年程ノ、近キモノトハ見エザリキ。

コノ日ハ、アヤニクニ、雲アリテ、雨サヘ、途ニテ降リ出デタリ。モシ、天氣ノ晴レタルトキ、コヽヨリ、四方ヲ見渡サバ、眺望ノ美、イカナラント思ヒヤラレタリ。（西遊記參照）

第二十三課　太沽砲臺の占領

明治三十三年六月、清國に、義和團（ギワダン）といふ暴徒起りて、鐵道をこぼち、電信線をたち、外人を殺害し、北京にせまりて、居留地を焼きはらひ、公使館を砲撃せり。清國政府は、之を討ち平げざるのみならず、暗に、其の暴擧を助くるが如きさまなりき。

六月十七日、太沽（タイクー）砲臺の清兵は、砲門を開きて、列國聯合艦隊に向ひて、戰をいどめり。聯合艦隊は、直に、之に應じて、砲臺の前面を砲撃す。戰のたけなはなる頃、陸戰隊は、砲臺の背面に向ひて行進せり。

時に、我が兵は、其の後軍にあり。清兵、よく戰ひければ、前軍苦戰し、急に、縱列を變じて、横列散兵に改めたり。我が兵、機に乘じ、進みて、砲臺に迫りぬ。清兵、必死となりて防ぎ戰ふ。彈丸、雨の如く下る。指揮官服部中佐以下、戰死せし者多し。我が兵屈せず、とつかんして進み、直に、石門に迫る。其の右側に、砲彈のうがちし穴ありければ、白石大尉は、之より入りて、門上に立ち、大音聲に、『日本兵先登第一』と叫びたり。我が兵、石門をおし開き、英兵と並び進みたりしに、清兵、恐れて逃げ去れり。かくて、日章旗は、はやくも、高く、砲臺上に掲げられたり。

第二十四課　天津城の陷落

明治三十三年七月十三日、我が軍は、列國聯合軍の主力となりて、天津城を攻め、苦

戰すること一晝夜にして、之を拔けり。

この日、我が兵は、早朝より、英、米、佛の兵と、天津城の南門に向ひ、露兵は、獨兵、及、佛の一部の兵と、水師營に向へり。

かくて、我が兵、南門に近づきしに、清兵は、はやくも、砲門を開きければ、我が砲兵も、これに應じて、砲擊を加へたり。砲戰、凡一時間の後、我が步兵は、佛、英、米の兵と共に、

突擊して進みしに、清兵、こゝを先途と、はげしく、銃砲を發射しければ、大隊長服部少佐以下、戰死せしもの、甚多かりき。我が兵、勇をふるひ、屍をこえて進み、南門を距ること、凡百間ばかりの地に達せり。

時に、清兵、城外の堀に、身をかくして、斜に射擊する者ありしかば、彈丸、三面より、我が兵の頭上に注ぎ、死傷する者、算なし。

我が兵、一歩を退かば、清兵、忽、勢を得て、聯合軍は、全敗するに至るべきが故に、士卒、皆、死を決して、かたく、其の地を守りけり。翌十四日、天、まさに明けんとする頃、我が工兵は、彈丸を冒して、城門に進みより、火藥を用ゐて、門扉を破れり。此のひゞきを合圖として、全軍、一時に、とつかんしてせまりしに、門内に、更に、一門ありて、入ることを得ず。時に、我が決死の兵、城壁をこえ、城門のくさりを切りて、門扉を開きければ、我が兵、先、突進して、清兵を追ひはらひ、はやくも、日章旗を、南門上に、高く掲げたり。これ、天津城占領の先登なり。

第二十五課　雲にそびゆる

雲にそびゆる　富士のみね

さゝなみよする　琵琶のうみ

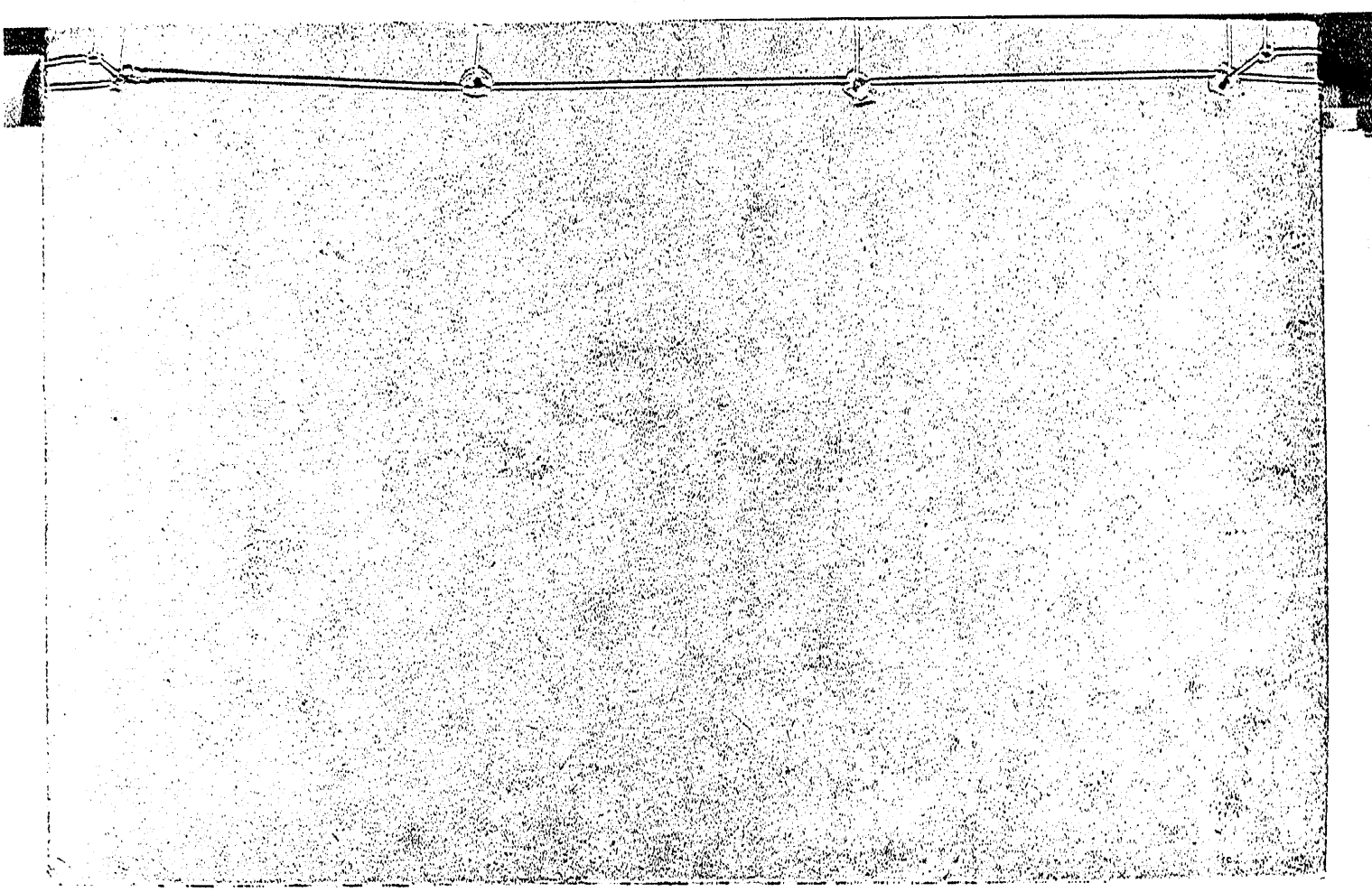
景色たゝなる　大やまと
あつさ寒さの　ほどもよく
花さきにほひ　鳥うたひ
瑞穂ゆたかに　みのるなり
かゝるめでたき　國はしも
國てふくにゝ　たぐひなし

高等小學國語讀本一終

明治三十四年八月十一日印刷
明治三十四年八月十五日發行

著作權所有

編者　西澤之助　東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行者　株式會社國光社　東京市京橋區築地二丁目二十一番地
右代表者　橋本恵次郎　東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷者　河本龜之助　東京市京橋區築地一丁目十八番地

定價
卷ノ一　金貳拾錢
卷ノ二　金貳拾錢
卷ノ三　金貳拾壹錢
卷ノ四　金貳拾壹錢
卷ノ五　金貳拾貳錢
卷ノ六　金貳拾貳錢
全六冊金壹圓二拾六錢

（高等小學國語讀本三學年用奥付）